



<連載66>

フローティングホテル 「スカンジナビア」



大阪府立大学海洋システム工学科助教授

池田良穂

伊豆の 入り江のひとつ木負(きしょう)に美しいクリッパー型の純白の客船「スカンジナビア」が静かに浮かんでいる。この船は現在プリンス・ホテル系の洋上ホテルとして稼働しているが、クルーズ歴史史上にもその名前を残す由緒ある客船である。このような有名客船が、日本で保存船として大事に使われていることは船ファンとしては本当に嬉しいことである。

スカンジナビアは1972年にスウェーデンのゴータベルケン造船所でノルウェーのベルゲン・ライン向けに建造された。船名はステラ・ポラリス（北極星）。総トン数は約5,000トン。当時としては極めて珍しい本格的なクルーズ客船として計画され、100名定員の豪華プライベートヨット・タイプ船として建造された。当時はまだ飛行機もなく、船が外国との交通機関として重要な役割を演じていたが、余暇として船の旅を楽しむ人は一部の富裕階級に限られており、そうした乗客を対象として夏はノルウェーフィヨルドやバルト海、冬は地中海などでのクルーズを実施していた。現在稼働中のクルーズ客船で言えば、海外ではシーゴッデスやシーボーン・プライド、日本では昭和海運のおせあにつくぐれいす、などのクラスの大先輩と言える。

1972年に完成して以来主にヨーロッパ水域でのクルーズを続け、第2次大戦後もクルーズ客船としての活躍を続けたから、まさにクルーズの歴史を背負って来たといっても過言ではない。1951年にはスウェーデンのグリッパー社に売却され、乗客定員も150名に増やされ、全キャビンにトイレ、バスそして空調設備が設けられていた。また、欧州の船には珍しくシングル用キャビンも設けられていた。

しかし、このように乗客定員の少ないクルーズ客船の経営は難しく、船令も高齢となったことから、ついにクルーズから撤退し、なんと日本に買い取られることとなった。

以来、伊豆の海で高級リゾートホテルとして利用されている。内部の改造は最小限とされてるから、ヨーロッパでクルーズ客船として活躍していた当時のインテリアを楽しむことができ、往年のクルーズの雰囲気にはばし浸ることができる。

10数年前に、まだ学生だった頃に一度泊りに出掛けたことがあった。当時、学生だった筆者には目玉が飛出るほどの宿泊料であったような印象が残っている。この2月にまさに久しぶりにまた泊りに出掛けた。ちなみに、宿泊料は夕、朝食

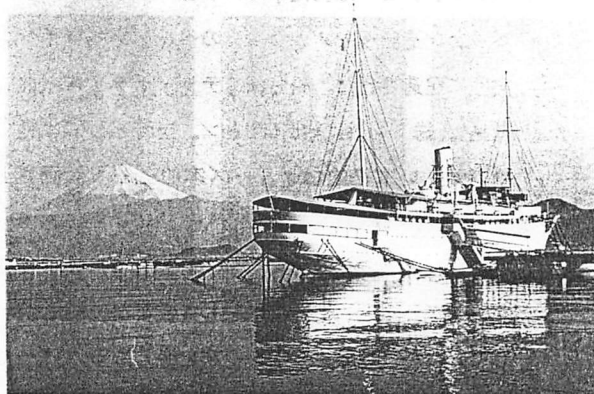
付でシングルルームが15,000円。あまり高いとは感じなかったのは、今の筆者が多少裕福になったからなのか、ホテル側の努力で価格を押さえて相対的に安くなったのかはさだかではない。

沼津から高速客船「こぼるとあろう2」に乗船し戸田へ向う。沼津からタクシーを飛ばした方がスカンジナビアには近いのだが、時間があつたのでできるだけいろいろな船には乗っておこうと思った次第。快適に海上を走って航海時間はわずか30分。富士山がその美しい姿を見せていた。戸田でおいしい魚料理で昼食を済ませた後、タクシーでスカンジナビアへと向った。細い山道をくねくねと30分近くも走る様子を体験してみて、伊豆海岸では海上交通機関が優位なことがよく分った。この周辺では高速カーフェリーの可能性もあるのではないかと思う。

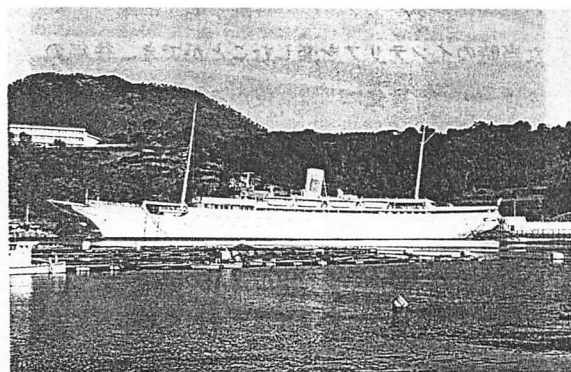


こぼるとあろう2

タクシーは スカンジナビアの繋がれている
棧橋の入口に到着。船内に入るとまるで別世界に入ったよう。古き良き時代の高級客船の雰囲気
が漂っている。グリル北欧で午後の御茶を飲む。こ
この窓ガラスには男女の出会いから結婚までの物
語りをモチーフにした模様が彫られている。夕食
は船首にあるメインダイニングルームでスモーガ
スポーツ。すなわちバイキング料理。この部屋は
かなりのシアーがついていて、かつやや船が横傾
斜しているためにテーブルが傾いている。装飾は
アールデコ調でマホガニーをふんだんに使った欧
州らしいインテリアとなっている。夕食後はバー
北極星で食後酒を楽しむ。ここの天井には星座を
あしらったガラス細工がはめられており、これも
なかなかの見もの。ただ、このシックなバーにカ
ラオケにのってあまり巧くもない歌が流れてきた
のはいささか雰囲気にも馴染まないものだった。



スカンジナビア



スカンジナビア